研究ノート

青山延寿研究―履歴と著作目録を中心に―

木戸之都子

はじめに

本稿は青山延寿に関する基礎資料を調査した結果をまとめたものである。この調査を始めたきっかけは茨城大学図書館の貴重図書室に所蔵されている「青山延寿日記」（三一冊）を解読していく上で必要になったからである。この日記は約三〇年前に山川菊栄[1]から茨城大学に寄贈された。青山延寿は幕末の水戸藩士であり、彰考館・弘道館に勤め、『大日本史』の編纂と藩校弘道館の教員として子弟の教育にあたった学者であった。山川菊栄は女性解放運動の先駆者として有名だが、その青山延寿の孫[2]にあたる。

本稿の内容は（一）青山延寿の基礎資料［青山家の系譜と青山延寿の履歴など］、（二）青山延寿の著作目録、（三）「青山延寿日記」についてである。

なお、この調査はまだ途中であるので、経過報告になったことを断っておく。

一、青山延寿の基礎資料

1、青山家の系譜

次頁は、「水府系纂」[3]『覚書 幕末の水戸藩』[4]『大日本史紀伝志表撰者考』[5]を参照した。なお、□の囲みと○印の数字は筆者が付けたものである。

青山家の先祖は不詳。高祖は六郎延久と云い、永禄三年（一五六〇）年丹波を出て、太田城主佐竹義篤に仕え、常州多賀郡水木（現日立市水木町）の城主（四五〇石）となった。五兵衛延友の代になり、慶長年中佐竹義宣の秋田移封の際、帰農して常州磯原村（現北茨城市磯原町）に住む。その後、興道（おきみち）の代になり、在地の郷士野口家の下風に立つのをいさぎよしとせず、水戸に一家をあげて移住した。

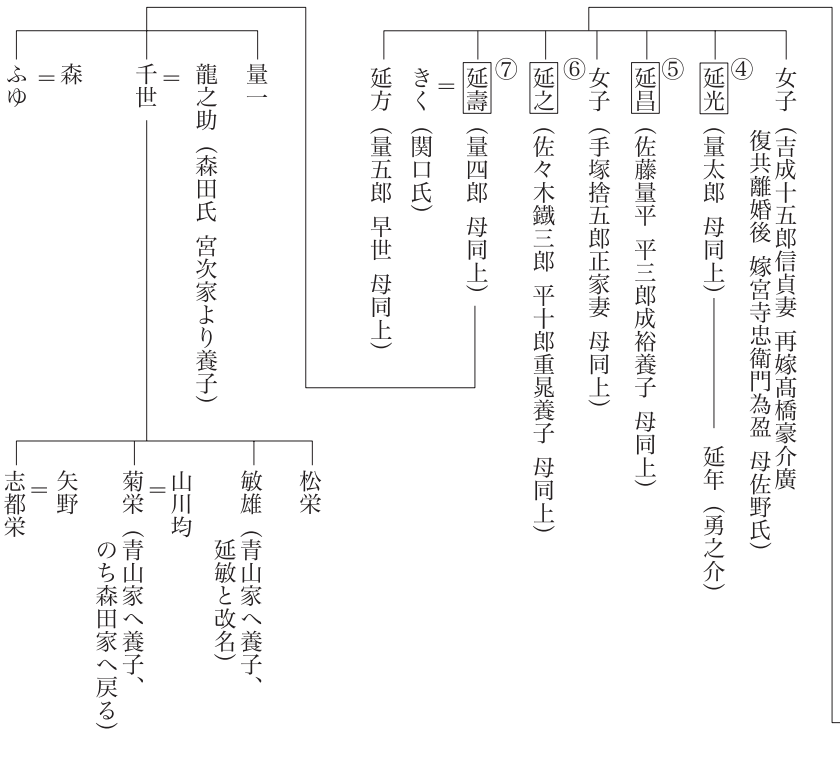
①青山興道。字は子誠、西塢又は一渓と号し、清内と称した。学を好み、名越克敏の門人となる。寛保三（一七四三）年初代舜水祠堂守で先師に当たる田代一遊（倍政）の跡をうけて二代祠堂守となり、一遊が藩命で開いていた塾も引き受けた。同年九月一七日には彰考館（以下史館）雇いとなる。宝暦六（一七五六）年九月五日歿。年五五歳。

②青山延蕤（のぶつね）、第三代祠堂守。享保一四（一七二九）年一二月処士

『人文コミュニケーション学科論集』三号、五五・七三頁

[182] © 2007 茨城大学人文学部（人文学部紀要）

青山家略系図



小泉正房（佐竹の典医）の次男として水戸に生まれたが、興道に子がなかったので、見込まれて養子となった。諱を延彝、字を子好、瑶渓と号し、一之進と称した。菊池南汀の門人である。寛延二（一七四九）年一〇月二七日史館に入って編修に加わり、立原翠軒の下で働いた。小笠原流（礼式）の師匠も兼ねた。享和元（一八〇一）年八月歿。年七三歳。

③青山延于、延彝の第三子。諱を延于、字を子世、雲龍又は拙斎と号し、量介と称した。立原翠軒門下で寛政六（一七九五）年史館に入り、文政六（一八二三）年総裁。弘道館の教授頭取となる。天保一四年歿。年六八歳。著述は『皇朝史略』『明徴録』『文苑遺談』『文昌堂銭譜』他多数。

④青山延光、延于の長子。諱を延光、字を伯卿、佩弦斎又は晩翠と号し、量太郎と称した。文政七（一八二四）年史館に入り、天保元（一八三〇）年総裁代役、天保一一（一八四〇）年弘道館教授、天保一四（一八四三）年弘道館教授頭取、弘化三年国史編修頭取、烈公歿後、文久三年側用人兼弘道館教授頭取、明治二（一八六九）年東京大学中博士、明治四（一八七一）年歿。年六四歳。著述は『国史記事本末』『野史纂略』『征韓雑志』他多数。

⑤佐藤延昌、延于の第二子。諱を延昌、字を仲卿、松渓と号し、量平と称した。「山海庶品」という生物図鑑の著者として知られる佐藤中陵の養子となり、書画に関する著作を残した。嘉永六（一八五三）年没、年四三歳。著述は『皇朝書画譜』他。

⑥佐々木延之、延于の第三子。諱を延之、字を叔卿、柳庵と号し、鉄三郎と称した。佐々木重晃の養子となる。天保一三（一八四二）年史館に入り、弘化二（一八四五）年弘道館訓導。明治四（一八七一）年没、年五六歳。著述は『柳庵文集』他。

⑦青山延寿、延于の第四子。諱を延寿、字を季卿、鉄槍と号し、量四郎と称した。

水戸藩における青山家の文教面での活躍をみると、このように祖孫一家をあげて学者が輩出したのは珍しい。とくに父延于と長兄延光は史館総裁・弘道館教授頭取を歴任し、嘉永二（一八四九）年『大日本史』を完成させている。[6] また師弟の教育にあたったことなど、その功績は大きい。

2、青山延寿の履歴

青山延寿（文政三～明治三九年）（一八二〇～一九〇六年）の履歴について「水府系纂」[7]より引用する。（読点は筆者による）

量四郎延寿、天保十二年辛丑五月二十九日學問出精ニ依テ合力トシテ三人扶持ヲ賜ヒ、弘道館勤十四年癸卯十月朔、切符ヲ賜テ歩行士弘道館訓導トナル、弘化二年乙巳十二月二十五日小十人組ニ進ミ、勤方如元三年丙午二月五日史館勤格式如元、二十六日役切符召上ラレ三人扶持ヲ賜テ小普請組、嘉永五年壬子十二月十九日切符ヲ賜テ歩行士、六年癸丑三月十四日弘道館訓導トナリ格如元、安政二年乙卯七月二十九日小十人組、三年丙辰三月二日馬廻組トナリ訓導続テ如元、四年丁巳三月十四日大番組弘道館助教トナリ、是年四月二十七日國史編集掛リトナル、門奈章太郎直好妹ヲ娶ル離婚、再ヒ小笠原小野吉長俊女ヲ娶ル死ス、後関口九郎次郎信義妹ヲ娶テ一男ヲ生ム量一某ト云

青山延寿は水戸藩士青山延于の第四男として水戸の田見小路（現水戸市北見町）に生まれた。青山家は四代にわたって史館に勤めた学者の家系である。とくに延于・延光は烈公斉昭の信頼が厚かった。延寿自身も斉昭によって新規お取り立てとなり、史館・弘道館に勤めた。文芸の面では、学問の家に育ったせいか、小さい頃から書を読み、歴史に造詣が深く、詩文に優れていた。武芸の面では特に槍術を得意とし、天保九（一八三八）年斉昭に賞されて鉄槍を賜ったことから鉄槍と号した。[8]

青山延寿について『覚書 幕末の水戸藩』[9]に引用された「遊常（ママ）北日記」の抄本の冒頭にもまとめられているので抜粋して紹介する。

延寿は天保九年より一〇年に至る一年間、江戸勤務の父に従って江戸に留まり、聖堂の古賀小太郎佩庵について学ぶ。天保一二年五月、一二歳、弘道館勤め、三人扶持。天保一四年弘道館訓導に任じお役料一〇両を給せらる。弘化三年斉昭雪冤のため江戸に出て紀州公に上書せんとする間際に病気となり、その計画がもれて免職、お役料とりあげ、小普請入りとなる。嘉永六年復職。慶応二年弘道館教授頭取代理、彰考館権総裁となる。明治元年九月、会津城落城を前にして諸生党の一派が官軍の重囲をついて疾

風のごとく水戸を襲った。虚をつかれた水戸では、動員令より諸生党に先を越された所も多く、城に向かおうとした延寿は足の怪我で歩行困難、息子の肩にすがって行き悩んでいる所をとりかこんだ諸生党の一人が名をきいて「先生ならよし」といって走り去った。これを口実として職と邸を奪われ、蟄居を命ぜられた。廃藩置県後許され、明治五年東京に居を移し、東京府庁地誌課、修史局等に勤めたが、一二年辞職、旅行・著述に晩年を送った。

延寿の風貌、兄弟四人の関係については延寿が明治になって参加していた舊雨社の『舊雨社小伝』[1]に延寿の項があり、次のように記されている（原漢文）。

季卿兄弟は四人、又皆文筆に長じ、父兄相継いで史館総裁と為る。季卿之に副う。伯氏の詩文は天性より出で、著述尤も多し。仲の書、叔の詩皆妙。季卿も亦た著作に長じ、伯氏を助けて諸書を刪定し、壎篪集有り、兄弟相互に唱和し、隙に藝文を評す。之を翠微の三魏を善くす。藩主景山公に召されて技を試せば、磋賞して鉄槍を賜う。因て以て号と為す。性飲を嗜まず、然るに客に対して談笑し、声は屋壁を撼わす。筆を使えば大書し、勢は嬌龍の如く、英気欝勃たり。鋒鋩四もに出でて、鉄槍の号に負かず。（季卿＝延寿。伯氏＝長兄延光。仲＝次兄延昌、叔＝三兄延之である。『壎篪集』は四兄弟の作品を集めた延寿出版の作品『壎篪小集』のこと。）

これによると、延寿の体格は小柄であったが武芸に優れ、豪快な性格であったこと、四兄弟は仲が良く、皆文筆に優れていたことがわかる。延寿は末っ子であったせいもあり、兄弟たちの著作の手伝いをして出版を担当していた。生来が体を使うのを厭わない性格だったようで、障子貼りや畑仕事や井戸浚いなども日常的に行っている様子が「青山延寿日記」に記されている。健脚で登山や旅行も趣味とした。また、父延于が非常に古銭収集を好み、その影響で延光・延之らと共に古銭研究に勤しんだ。水戸藩士の古銭収集に関しては秋山高志氏の研究[2]があるが、それによれば、彼らの古銭収集は趣味鑑賞にとどまらず、書道史や貨幣史の関心にもつながっていたという。実際、青山延寿の天保一五（一八四四）年の日記には、延寿が延之と共に古銭打拓を行っていたことがしばしば記されている。

延寿が生きた幕末維新期は幕藩体制の行き詰まりの中、外憂内患の様子を呈していた。とくに水戸藩は改革派と保守派の激しい争いに揺れ動いて、延寿もその藩内抗争に巻き込まれていったが、若い頃よりその内情をみていたせいか、結局は中立の立場をとっていたのである。このときの延寿の考えは、保守派に走ったと疑われた友部八五郎（弘道館の同僚で友人）に送った書簡に表れている。[13]（なお、青山延寿の評価に関しては詳しくは別稿を待ちたい。）

3、墓碑銘

以下の碑文は筆者が採拓したものによる。読点は長南倉之助

[14]「水戸先哲烈士の墓（九）」を参考にした。延寿の碑が立っている場所は水戸市松本町・常磐共有墓地の北西側（中央通路の奥にある）。篆額は細川潤次郎文学博士、碑文は佐々木簀撰文。碑の左側には早くして亡くなった妻（小笠原氏）（嘉永三年一一月九日歿一八歳）の碑と後妻関口きく（山川菊栄の祖母）との間に生まれた長女はつの墓石が並ぶ。碑文は一行四一文字、一七行。その後に二行の銘がある。



所在地… 常磐共有墓地（水戸市松本町）
大きさ… 高200×幅90×厚14㎝

鐵槍先生碑

鐵槍先生以明治卅十九年十一月十七日、病歿于河原子別墅、距生文政三年二月五日享年實八十有七、葬常磐村共有墓地、後五周忌辰、乃有樹石之擧、從遊諸子屬簀表墓、簀固辭不聽、乃據先生年譜、謹叙基踐履之概云、先生諱延壽、稱量四郎、字季卿、號鐵槍斎、諱青山氏、贈從四位拙斎先生第四子、姒佐野氏、先生小壯好學、又嗜武技、最善槍術、極其蘊奥、烈公褒嘉手賜一鐵槍、先生記喜遂以名斎、天保十二年五月、以精學之故給三口俸、為學校務、十四年十月擢歩士、為弘道館訓導、弘化二年三月、進小十人訓導、安政三年三月、遷馬廻訓導、翌年三月、進大番為助教兼國史編脩、萬延元年八月烈公薨、承命撰誌、元治紀元十一月、為弘道館教授頭取代、慶應二年五月、兼彰考館總裁代役、明治二年二月、獲謚、給四口俸、屏居下市馬場、四年十一月、為小普請組、迨藩政轂命東京府九等出仕地誌編修、移居東京麹町區四番町、實五年七月也、九年十月、任式部寮二等協修命修史局第二課藩史編修、十年二月、任修史館三等掌記、十二年四月辭職、先生博洽最遂史學、薄臣朝官終始編修前後在職殆四十年、退罷猶不廢其時、晨昏采擇群籍手不釋、所著有皇朝金鑑、戦略新編各數十卷、皆行於世、先生交遊頗廣、都下鴻儒碩學苦学来往通問無虚日、而資稟孝友端懿、丁考妣憂哀備禮至心衷三年之久、平生勤倹自奉甚薄、好趨人之急、誠実以接人、廉潔以持己、能竭心公共之事、征清之役献一百金及恤兵手蛻五千條、日露大戦献二百金、褒賜木製套抔、体軀康強、精力絶人、齢踰七旬健歩巡遊足跡遍五域八道、而名區勝境遐陬僻壤探討則記其民情風俗山河形勢之要、大八洲遊記是也、如讀史偶筆、壎篪小集、讀史雑詠、鉄槍斎文集蓋其緒餘耳、勉著皇朝通鑑未竣功而終、藁木蔵於家、先配小笠原氏、歿、次配関口氏、生一男二女、又歿、男量先歿、長女適森田龍之介、次適森祇敬、後配田中氏、無子、以先生外孫森田延敏、為嗣

明治四十三年十一月十七日

従二位勲一等　文学博士　男爵　細川潤次郎題額
佐佐（ママ）木簀撰文　門人　小澤一郎謹書
嗣子　延敏　建石

（佐々木簀は延之の息子で延寿の甥）

常磐共有墓地には父延于・兄延光の墓が別にあり、本草学者佐藤

中陵の養子になった延昌の墓と延光の息子青山延年の墓がまたそれぞれ別にある。青山延寿の家の墓としては東京に居を移してから[15]青山墓地に墓を購入している。そこには[16]藤野海南の撰文が刻まれた青山家の墓と延寿の撰文による後妻関口きくの墓碑銘がある。

4、青山延寿の肖像画（軸装 絹本 淡彩）



（縦108㎝×横40㎝）山川菊栄寄贈　茨城県立歴史館蔵

延寿の肖像画は他に、『大八州游記』（青山延寿著）の巻之一之下、『鉄槍斎文鈔』（明治七年夏　画：内藤誠拝写）がある。いずれも晩年の肖像である。

5、青山延寿の落款印（篆書体）

「青山延寿」



「字季卿」



6、「延寿」の読み

延寿の読み方であるが、小川貫道『日本漢学者伝記及び著述集覧』（一九三五年 關書院）では「鉄槍斎（てっそうさい）延寿」で読みがない。『大日本人名辞書』（一八八六年初版 一九三七年刊講談社）と『日本大人名辞書』（一九七九年 平凡社）では「えんじゅ」となっているが、『明治維新人名辞典』（一九八一年 吉川弘文館）と『日本人名大事典』（二〇〇一年 講談社）は「のぶひさ」になっている。『人物レファレンス事典Ⅳ 日本人名典拠録』（一九八三年 日外アソシエーツ）を合わせて確認した結果、一九七〇年代までは「えんじゅ」で、それ以降、「のぶひさ」を用いている。なお、『新潮日本人名辞典』（一九九一年）や『朝日日本歴史人物事典』（一九九四年）には青山延寿の記載がない。

青山延寿の年譜

元号	西暦	年齢	出来事
文政三	一八二〇	1	二月五日、水戸田見小路に生まれる。
文政六	一八二三	4	父延于の史館総裁就任、青山一家は天保元（一八三〇）年まで江戸小石川藩邸長屋に住む。
文政一二	一八二九	9	一〇月徳川斉昭、水戸藩第九代藩主となる。
天保九	一八三八	20	延寿、父に従い江戸小石川藩邸に一年間住む。聖堂の古賀小太郎佩庵について学ぶ。斉昭から鉄槍を賜う。
天保一二	一八四一	22	五月二九日、三人月俸弘道館務となる。八月一日、弘道館仮開館。

元号	西暦	年齢	出来事
天保一四	一八四三	24	一〇月一日歩行士、弘道館訓導となる。一一月、父延于病歿。
天保一五（弘化元）	一八四四	25	五月、斉昭、幕府より致仕・謹慎を命ぜられる。一〇月、水戸藩内に斉昭の雪冤運動が起こる。
弘化二	一八四五	26	一二月二五日、小十人組に進み、訓導元の通り。
弘化三	一八四六	27	二月五日史館入り、地理志編修にあたる。斉昭雪冤のため、無断出府を試みて発覚。二月二六日免職、小普請組に落とされる。
嘉永二	一八四九	30	一二月、水戸藩『大日本史』紀伝刻本成る。小笠原家次女と結婚。
嘉永三	一八五〇	31	一一月、妻、死産で病歿（一八歳）。
嘉永五	一八五二	33	一一月、関口きくと再婚。
嘉永六	一八五三	34	三月一四日、弘道館訓導に復職。御役料米三石。一〇月、娘はつ生まれる。
嘉永七（安政元）	一八五四	35	一月九日、娘はつ、病歿（一歳）。
安政二	一八五五	36	七月二九日、小十人組に進み、訓導。九月二〇日～一〇月五日、休暇を取り先祖墓参りを兼ねて常陸北部の景勝地探訪に出立。帰路、安政の大地震（一〇月二日）で藤田東湖・戸田忠敞が圧死したことを知る。
安政三	一八五六	37	三月二日、一人扶持増えて都合四人扶持となる。馬廻組に進み弘道館訓導元の通り。家塾を開いて門人を受付ける許可を得る。
安政四	一八五七	38	三月一四日、大番組に進み、弘道館助教となる。一五石五人扶持役料米五石。四月二七日、国史編修掛となる。五月九日、弘道館本開館。娘千世生まれる。

元号	西暦	年齢	出来事
安政七（万延元）	一八六〇	41	八月、烈公斉昭歿する。娘ふゆ生まれる。
元治元	一八六四	45	二月一四日史館勤兼務御免。七月、天狗・諸生党の乱勃発。一一月一九日、弘道館教授頭取代役となる。
慶応元	一八六五	46	二月二八日、弘道館教授頭取代御免。八月、史館編修に入る。
慶応二	一八六六	47	五月、史館総裁代役を兼務する。
慶応四（明治元）	一八六八	49	九月、会津落城、諸生党水戸城襲撃。弘道館の争い。登城途中の延寿、無事であったが藩より蟄居謹慎を命ぜられる。
明治二	一八六九	50	二月、水戸下市馬場に蟄居謹慎。
明治四	一八七一	52	七月、廃藩置県。一一月、謹慎解除、小普請組となる。
明治五	一八七二	53	家族を残し出京、神田小川町に借家する。旧友重野安繹の紹介で東京府出仕決まる。六月末日、東京府辞令交付（九等出仕地誌編修）。九月、居を東京府庁官舎に移す。水戸より家族を呼び寄せる。
明治六	一八七三	54	青山一家、麹町四番地の旗本屋敷を買い求めて移住する。
明治七	一八七四	55	七月一七日、長男量市チフスのため急死。青山墓地に埋葬。
明治九	一八七六	57	一〇月、修史局に転じ、第二課藩史編修となる。
明治一〇	一八七七	58	二月、修史館三等掌記となる。
明治一二	一八七九	60	四月、修史館の職を辞す。
明治二二	一八八九	70	一一月四日、妻きく病歿。青山墓地に埋葬。

元号	西暦	年齢	出来事
明治二三	一八九〇	71	菊栄、森田龍之助・千世の第三子として生まれる。
明治二六	一八九三	74	一月、史館に入ったがまもなく辞す。河原子の別邸に隠居して著作や旅行の日々を送る。
明治三九	一八九九	87	一一月一七日、河原子村（現日立市河原子町）で病歿。田見小路の家で葬儀。

二、青山延寿著作目録

青山延寿の著作を調査する際にまず使った文献は『補訂版 国書総目録』（全八巻、著者索引）（一九八九～一九九一年 岩波書店）と『古典籍総合目録』（全三巻）（一九九〇年 岩波書店）『国書人名辞典』（一九九三～一九九九年 岩波書店）清水正健『増補 水戸の文籍』（一九三四刊・一九七一年再版 水戸の学風普及会）である。ただし、これらの文献は主に江戸時代末までの典籍に限られているため、明治以後も精力的に執筆活動を行っていた延寿の著作を調べるために、各機関の蔵書目録などを検索した結果で補い、できるだけ現物を確認した。今回、調査した機関は次の通りである。国立国会図書館（以下国会図）・茨城大学図書館（茨大図）・東京大学史料編纂所・茨城県立図書館（茨県図）・茨城県立歴史館（歴史館）・茨城県偕楽園事務所 弘道館事務所（弘道館）・水戸市立図書館（水戸市図）・水戸市立博物館（水戸市博）・日立市立郷土博物館（日立郷土博）など。

分類は『内閣文庫図書分類目録』を参考にして適宜項目を追加した。書名・巻数・大きさ・編著者名（成立年）・版（所蔵者）・筆者が確認したものの所蔵場所・解説の順に原則として記載した。なお、茨城大学図書館蔵には書名の後に＊を付けた。

1、延寿自身の著作

総記

「鉄槍斎文鈔（てっそうさいぶんしょう）」 ＊四巻（全五巻）22㎝　青山延寿著　明治二一（一八八八）東京・松昜家塾活版　木活字本　茨大図・茨県図蔵

序文は重野安繹（明治二〇年七月）、校訂：巻一（門人柳瀬勝善）巻二・三（加治濟）巻四（加治秀政）巻五（鈴木成章）今まで延寿が書き溜めた文をまとめたもの。他著者の作品に書いた序文も含む　合計五四篇

巻一「與彰考館総裁會澤先生書」「上紀州公書」「上三條公書」「上春山伊達老公書」「駁日本雑事詩與黄公度書」

巻二「讓良親王論」「新田左中将論」「武田信玄論」「上杉謙信論」「石田三成」「松平信綱論」「項羽論」「韓信論」「論東湖先生與先人書」「論西郷盛之戦」「論山水之勝」

巻三「劉誠意文抄序」「戦略新編序」「佩弦斎外集序」「国史紀事本末後序」（延光）「酒史新編序」（延光）「櫻史序」「南部五世傳序」「空谷遺稿序」「壽馬操志序」

巻四「鉄槍斎記」「久慈渠記」「含雪楼樓記」「遊愛宕山記」「東邸遷居記」「植櫻記」「上山新道碑記」「化石記」「石巻書籍館記」「壮魚沼郡中學」「得山軒記」「新建安藤先侯祠廟記」「鹿嶋中學校記」「勉斎記」

「蕉梧軒記」
巻五「足利學校聖像考」「日向高千穂地名考」「拝鹿嶋神宮文」「擬乞禁屠牛疏」「岡伯儀墓碣銘」「源烈公墓誌」「逸民飛田先生墓碑」「森豹卿墓碑」「近藤次郎左衛門略傳」「加治季長」「青山伯卿傳」「綴之妙不可言」
附録「寿家君六十序」（長女青山千世の序文が巻末にあり）

巻四の「久慈渠記」は安政二（一八五五）年、常陸北部を旅行した際に、その地の郡奉行だった高橋多一郎に依頼されて作った望月五郎左衛門の功績（久慈川支流の灌漑の便を図った）を称えた記念碑の碑文草案。この『鉄槍斎文鈔』のうち一七篇の書き下し分が『水戸学大系』[17]（第四巻）に収録されている。

「上春山伊達老公書」 ＊写本　竪帳　一五丁（26㎝）　表紙題目朱書き　茨大菅文庫蔵　裏表紙に明治丙戌五月阿部氏蔵本を筆写したとある。菅政友が筆写したと思われる。

「鉄槍斎青山延寿稿本」 青山延寿　稿本二冊　大阪中之島図書館蔵
若干の詩と『英哲年齢便覧』の原稿。

「鉄槍先生手録小抄」 ＊青山延寿著　三七丁　25㎝　和装本　市野沢寅雄氏寄贈　茨大図蔵　「弘化三年二月鉄槍先生上紀州公書」「鉄槍先生封事」「（鉄槍先生手守）万延元年三月桜田事件後烈公論文」「弘道館月次講習」「学校諸役人名」「安政四年手蹟御吟味順書」裏表紙に市野沢寅雄氏手写とある。

文学

『読史雑詠』 ＊乾・坤（二巻本）（二巻并附録一巻）三三丁・二二丁・一一丁）水府・青山延寿著　慶応二（一八六六）年六月刊　江戸玉厳堂鋟版　和泉屋金右衛門出版　茨大図蔵・茨県図蔵　序文は昌平学儒員塩谷世弘、題辞は青山延光、青山延年校訂、跋文は友部熙正・津田信存・佐々木重之　送り仮名訓点付、頭注あり　巻末に楓湾居士・石河明善・枕山居士の評あり　五瀬皇子・豊城皇子以下古来数千家を歌って著されたものを詠出した詩集。『水戸学大系』第四巻の高須芳次郎氏の解題によると、延寿の代表作として「読史雑詠」をあげて以下のように解説している。
水戸学精神により、詩をもって、史上の人物を是非し皇道の真義を発揚するにつとめた名作で、詩句流麗、情緒また豊か。

「鉄槍斎詩鈔」 二冊（全三巻）　19㎝　青山延寿著（明治二九〔一八九六〕年）発売元吉川半七　第一巻（二九丁）第二巻（一九丁）第三巻（三二丁）序南摩綱紀　国会図蔵　第二・三巻が懐古雑詠・漫遊雑詠。頭注あり。近代デジタルライブラリーで画像データが見られる。

「鉄槍斎詩式」 青山延寿自筆草稿　古詩一九首　五一丁　17㎝　国会図蔵

「題画一百廿詠」 一冊二七丁　18㎝　青山延光・青山延寿編　明治二一（一八八八）年　序青山延寿　青山延寿出版　歴史館蔵
序文が「鉄槍斎文鈔」に再録されている。

「壎篪小集」 ＊全四巻四冊　明治三（一八七〇）年青山延寿編

表紙扉に明治庚午東京玉厳堂新鐫とある。序藤田彪（嘉永五〔一八五二〕）跋佐藤一斎　大沼枕山　塩谷宕陰　延嗣校訂　茨大図蔵

青山四兄弟の詩文集。収録内容は以下の通りである。

巻之一　伯兄文一五首・仲兄文一一首（三五丁）

巻之二　叔兄文一三首・延寿文一五首（四三丁）

（巻之二に青山家略系図が載っている）

巻之三　伯兄詩一百五首・仲兄詩六二首（三八丁）

巻之四　叔兄詩九六首・延寿詩九五首（三八丁）

巻之一と二が文で巻之三・四が詩に分かれる。

延寿は文一五首、詩が九五首。文は再録、「擬請崇奉新田中左中将祠書」「送福岡子明帰肥前序」「偕楽園賜宴詩序」「先君子全集序」「日光従駕円序」「日光行記序」「養斎記」「鉄槍斎記」「晩翠亭記」「南朝記」「論源豫州」「宋論」「続赤穂四十七士傳」「書揺渓先生詩鈔後」「櫻花賦」頭注に兄弟友人の評がある。

書　画

「書幅」

・青山四兄弟合作書画　軸装　墨画　安政四（一八五一）年　水戸市博蔵

・青山延寿書幅　全紙二点　聯落一点　水戸市博蔵

・青山延寿七〇歳の詩幅　五言古詩　聯落一点　明治二二年　日立郷土博蔵　『常北遊記』[18]に書き下し文が掲載されている。

・青山延寿八〇歳の書幅「春風呈寿　鉄叟時八十」　半切一点　秋山高志氏蔵

「扇面帖」

二冊全三三枚　左右48㎝　上下23㎝（うち延光八、延昌一〇・延之一〇、延寿六点）秋山高志氏蔵　花鳥風月を歌った歌や墨絵・色彩画（花・竹・風景）がある。

歴史・伝記

『宇内英哲年齢便覧』

全一冊　青山延寿編（明治二四〔一八九一〕年印刷・出版）松陽家塾蔵本　序青山延寿　国会図蔵　中扉に「鉄槍陳人輯」とある。皇朝、支那、西洋人の知られていない人物をとくに詳しく記す、としている。なお、名前は号で記している。配列はイロハ順。印刷者石川島支署（警視庁監獄署）発売元吉川半七・林平次郎　近代デジタルライブラリーで画像データが見られる。

『皇朝金鑑』

全五四巻二五冊　19㎝　青山延寿刊（明治二八〔一八九五〕年）刊　吉川半七　序細川潤次郎　国会図蔵・秋山高志氏蔵　茨県図は一五巻目から所蔵。神武以来、維新に至る三千載（年）の人々の言行を記している（歴史論・人物論）。漢文体。

第一冊目―君道　巻之一（講學）・巻之一（至孝）・巻之三（仁愛）

第二冊目―君道　巻之四（誠信・恭謙）巻之五（公平・節倹）

第三冊目―君道　巻之六（徳量）巻之七（剛明上・中）

第四冊目―君道　巻之八（剛明下）巻之九（勤政）巻之九（納諫上）

第五冊目―君道　巻之十一（納諫下）巻之十二（任賢人）
第六冊目―君道　巻之十三（審官・養士）巻之十四（恤民）
第七冊目―君道　巻之十五（重祀）巻之十六（賞罰）巻之十七（制治上）
第八冊目―君道　巻之十八（制治下）巻之十九（講武）巻之二十（賢妃）
第九冊目―臣道　巻之廿一（輔弼）巻之廿二（薦擧）巻之廿三（守職附恪勤）
第一〇冊目―臣道　巻之廿四（正議）巻之廿五（忠言）
第一一冊目―臣道　巻之廿六（権謀）巻之廿七（奉使）巻之廿八（忠誠上）
第一二冊目―臣道　巻之廿九（忠誠下）巻之三〇（忠義上）
第一三冊目―臣道　巻之三一（忠義下）巻之三二（気節上 附志気）
第一四冊目―臣道　巻之三三（気節下附志気）巻之三四（循史上）
第一五冊目―臣道　巻之三五（循史下）巻之三六（文學上）
第一六冊目―臣道　巻之三七（文學中）巻之三八（文學下）
第一七冊目―臣道　巻之三九（武技上）巻之四〇（武技下）
第一八冊目―臣道　巻之四一（精徳）巻之四二（謙譲・謹慎）
第一九冊目―臣道　巻之四三（正直）巻之四四（智識）
第二〇冊目―臣道　巻之四五（機敏）巻之四六（廉潔）
第二一冊目―臣道　巻之四七（度量）巻之四八（勇敢・公義・名言）
第二三冊目―臣道　巻之四九（規誡）巻之五〇（孝友上）
第二四冊目―臣道　巻之五一（孝友中）巻之五二（孝友下）
第二五冊目―列女上　巻之五四
第二六冊目―列女中・下　巻之五五

『戦畧新編』　一冊　青山延寿著　刊本　三五五頁　明治三〇（一八九七）年七月　松陽家塾発行　明治元（一八六八）年春延寿序 文吉川半七発売 奥村繁次郎印刷　歴史館蔵 漢文体で古来の諸将の言行を記録し、戦略を論じる。

巻之一（御軍門第一）巻之二（料敵門第二）巻之三（合戦門第三）
巻之四（出奇門第四）巻之五（狙詐門第五）巻之六（伏兵門第六）
巻之七（用間門第七）巻之八（水戦門第八）巻之九（火攻門第九）
巻之十（守城門第十）巻之十一（攻城門第十二）総計三百十五条

「讀史偶筆」　二巻　延寿、一七～一八歳の作。未刊。『国書総目録』には『近世漢学者著述目録大成』による、と記載されている。

「鉄槍斎文集」　全七巻　活版「地理志稿」あり　未確認

「時事記」

・「時事記」四 安政六（一八五九）年 一冊 和綴 竪帳25㎝ 水戸市立図蔵
・「時事記」（文久三年癸亥 六）一冊 和装本 写本 一〇四丁

自筆（中扉に「青山延寿筆」とある）国会図蔵

・「癸亥時事記」（文久三年）一冊 写真版　歴史館蔵『時事記は幕末の公私の記録を延寿が筆写したもの。国会図と歴史館の所蔵は同年のものだが別なものである。[19]『覚書 幕末の水戸藩』には「時事記」を三冊保管していたと記載されている。

「四異人伝」（青山延寿）東大史料編纂所に「長久保叢書」一二（一二）所収の写本がある。

「加賀藩史稿」重野安繹・青山延寿編　四冊　写本　明治一〇（一八七七）年頃　東大史料編纂所蔵（未確認）

第1冊：世家（第一［上］）前田利家（上）

第2冊：世家（第一［下］）前田利家（下）

第3冊：世家（第二）前田利長

第4冊：列伝（第四）加賀藩臣（一）

「小梅御屋敷詰姓名」（水戸徳川家中青山家文書所収）青山延寿著　安政六（一八五九）年 写真版・歴史館蔵　歴史館には同文書所収として、次の文書の写真版もある。「明治五年水戸藩職員録等級俸給簿」（青山量一写）・「小十人組順席（カ）」「小十人勤の時の書付」（安政二・三年）「諸色通」・「水戸より野州塩原迄馬駄賃帳」（嘉永七年青山量四郎内小栄松之介）・「西証日録」（嘉永七年 鳩居堂主人）など。

書簡

○差出人：延寿

「野口村（現御前山村）関沢長次郎宛延寿書状」明治二二（一八八九）年十月十二日付　関沢賢家文書所収（歴史館蔵）（関沢家祖父（関澤要介政徳）の碑文間違いあれば直す旨）

「同村関沢長次郎宛青山延寿書状」一八九三（明治二六）年五月四日付　関沢賢家文書（歴史館蔵）（岡千伃［延寿の友人元仙台藩伊達家儒医］を貴地で案内いただきたき旨）

「同村関沢長次郎宛青山延寿書状」明治二七（一八九四）年五月八日付（歴史館蔵）［水戸に罷下るにつき貴地へ罷出でたき旨］

「松岡（豊田天功）宛延寿書状」文久元（一八六一）年一二月（辞職の意を吐露した書状）四二行 高橋清賀子家文書所収（歴史館蔵）

「重野安繹宛青山延寿書状」（重野安繹宛名士書翰集）写真帳　一冊　21㎝　中沢力司現蔵（群馬県佐波郡境町）　東大史料編纂所蔵）

○受取人：延寿

「谷干城・南摩綱紀・杉孫七郎・重野安繹自筆書簡」四通（水戸青山鉄槍宛書簡集）（南摩綱紀書簡は明治三八［一九〇五］四月二一日付）巻子本　22㎝　茨県図蔵　日露戦争で延寿の娘婿森氏が戦死したことが書かれている。

「青山延寿宛横須賀静斎書簡」嘉永三（一八五〇）年丁卯三月　山川菊栄寄贈　歴史館蔵　（「明徴録」出版等に関する書簡で江戸の書肆との交渉の件を頻繁に送っている）横須賀は江戸彰考館員、延寿の後輩で明治一二年、延寿の紹介で修史館地誌編纂係となっ

ている。

地理・紀行・登山

「大日本史地理志稿」

『増補 水戸の文籍』[20]によると「鉄槍斎文集」に所収、「完備に至らずして止む」とある。

「常北遊記」 ＊青山延寿著 一冊 二五丁 23cm 鉄槍斎活版 明治二（一八六九）年 序佐々木重之 跋森蔚・津田信存 茨大図・茨県図蔵

附録（詩）（「泉森祠」「諏訪洞」「天妃山観日出歌」「立割山」「西金砂山」「南台山」「月居瀑布」「祭箭渓」「八溝山」「陰陽山」

附録（文）「常北諸勝詩歌序」「久慈渠記」

大森林造訳『常北遊記』[21]に口語訳付の解説が載っている。

「弔古荒辞」「登嶽唱和」（合刻本） 青山延寿編 九、一〇丁 25cm 刊年不明 木活字本一冊 水府：鉄槍斎活版

『弔古荒辞』（青山延于ほか著・青山延寿編）『登嶽唱和』（青山延寿、藤田彪・會澤安）秋山高志氏蔵

『大八洲遊記』 松陽家塾活版 一三巻五冊 明治二一（一八八八）年刊 茨県図蔵 延寿が引退後、全国を旅した際の紀行文 巻頭に明治三一（一八九八）年の藤野正啓はじめ六〇人近くの関わりある人物の撰文が載っている。巻之三から校訂者は手塚徳進ほか門人たちの名前が載っている。巻之一・二、諸氏の贈詩、遊鹿島記・遊日光山記・遊常北日記 巻之三・四、遊東山道記 巻之五・六・七 遊北陸道記 巻之八・九・一〇 畿内・東海道 巻之一一（南海道）・一二（西海道）・一三（山陽道）

なお、『大日本地名辞書』（吉田東伍編）にこの『大八洲遊記』がだいぶ引用されているという。[22]

『続大八洲遊記』 一冊（全五巻） 明治三一（一八九八）年一〇月刊本 九〇頁 19cm 岡千仞序 歴史館蔵（手塚陽軒旧蔵史料）・国会図蔵 巻之一、遊房総日記・遊東金日記（附・遊常南日記并帰省日記）癸巳帰省日記（蝦夷南侵考）巻之二、遊北海道前程日記 巻之三・四、遊北海道日記 巻之五、遊北海道帰程日記・遊那須温泉日記

日付入りで日記調になっている。明治二六（一八九三）年五月一〇日、水戸の地を踏んだ延寿の感想も記されている。

登山については秋山高志氏によると、[23]近世の登山例は宗教登山が最も多く、その他には鉱山師の探鉱、本草学者の採集、幕府諸藩の山林巡検、文人墨客の好奇心などが動機になっている、という。とくに水戸藩では文人墨客の好奇心、つまり近代的な趣味としての登山愛好の傾向が多く見られる。これは他藩の武士にはあまり見受けられない。この登山愛好の気風は明治以降も続いている、という。実際に延寿も安政二（一八五五）年には『常北遊記』で一〇以上の山に登っている。『登嶽唱和』は延寿が弘化三年に筑波山登山の様子を記した紀行文である。

教育

「青門肖像」　一冊　彩色　延于の次男延昌（松渓）序・画　延寿編水戸市図蔵（水戸市博寄託）父延于の門弟七、八歳から一四、五歳までの男子の肖像画。天保一〇（一八三九）年一〇月（弘道館開館の二年前）父延于の弟子七〇余人の似顔絵のスケッチ。延于の周りに子供たちが座している。ほとんどが弘道館の諸生になったと思われる。

「青門弟子籍」並びに「学舎規則」　一冊　吉成英文氏蔵　「青門弟子籍」は（天保一三～慶応四年〔一八四二～一八四二〕年まで）在籍した弟子の名前と年齢が書かれている。「学舎規則」は「松陽舎舎則」（明治一二〔一九三七〕年一〇月）のことである。歴史館に写真版がある。

古銭

「文昌堂銭譜」　全三巻一冊　26㎝　序青山延于　跋青山延光、佐々木延之天保一五年夏四月三日写　弘化二（一八四五）年九月二八日打拓青山延寿　一之三巻（正品）（四二丁）四巻（外国正品）三六丁・五巻（外国偽品）四八丁　国会図蔵

2、延寿が出版に関わったもの

「瑶渓先生詩抄」　筆者の詩を孫の延寿が抜抄したもの　巻末に弘化二（一八四五）年の暮秋の延寿の跋文あり。

「明徴禄」　＊続集　青山延于　一〇巻七冊　26㎝　一八六九年　鉄槍斎蔵版　茨大図蔵

「文苑遺談」　巻之一～三　続集　青山延于　鉄槍斎蔵版・木活字　歴史館蔵　水戸藩儒者の列伝

「拙斎先生文集」　鉄槍斎活版

「拙斎先生随筆」　一冊　弘道館蔵　文政一〇（一八二七）年一一月二四日の江戸本邸の火事についてなど　跋文青山延寿

「感旧編」　＊青山延光・青山延年編　水府鉄槍斎　茨大図蔵

「野史纂略」　青山延光　全五巻　一六、二七丁　26㎝　鉄槍斎活版木活字　出版年不明

「佩弦斎外集」　＊二二丁　26㎝　鉄槍斎活版　茨大図蔵

「征韓雑志」　青山延光編　一五丁26㎝　鉄槍斎出版　嘉永五（一八五二）年跋文あり

その他

「墓碑銘の撰文（関澤政徳墓碑）」　和綴　六丁　訂正入りの草稿　明治二二（一八八九）年七月青山延寿撰　歴史館蔵

この他、延寿が筆写した書物もあるが、今回は除いた。

なお、今後も青山家関係の文献を引き続き調査していく予定である。

三、青山延寿日記

「青山延寿日記」（全三一冊）（仮目録付）は茨城大学図書館貴重図書室[24]に所蔵されている近世文書群の中のひとつである。「はじめに」にも少し述べたが、山川菊栄より約三〇年前に茨城大学に寄贈されたものである。当時の菅井正三図書館員の仲介で茨城大学に入ったと記録にある。その後、故河内八郎教授によって補修・整理がなされた。日記の期間は天保一四～明治九（一八四三～一八七六）年まで三四年間であるが、慶応三（一八六六）年～明治二（一八六九）年の三年間が欠けている。形態はすべて横半帳。表紙はほとんどが「日録」となっている（例：天保一四年「癸卯日録」）。例外として、安政三（一八五六）年が「延寿日記」。万延元年は「庚申日録」と「万延元年二月長岡事件」（二月二二日～二八日）の二冊に分かれているので、目録では別にした。弘化三（一八四六）年は表紙がないが、本文冒頭に「弘化三年丙午日記」と記されている。

この日記の写真版が山川菊栄旧蔵「水戸藩家中青山家文書」の一つとして茨城県立歴史館に入っている。仮目録[25]を見ると茨城大学に「日記」の原本が入ったのは仮目録作成と写真撮影の終了後である。なお、山川菊栄の著書[26]には延寿は亡くなる直前（明治三九年）まで日記を書いていたとあるが、寄贈された日記は延寿が修史局に在勤していた明治九（一八七六）年までである。



「青山延寿日記」全31冊
茨城大学図書館蔵

日記の内容は、弘道館・史館への出勤の状況、冠婚葬祭、同僚・友人との交際、日常生活の様子、風雲急を告げていた幕末の出来事・事件関連など多岐にわたっている。

山川菊栄は祖父延寿死後、一六歳で一時的にではあるが青山家の養子になったことがあり（その後兄延敏が継いだ）、祖父が遺した資料を大事に保管していた。その資料は日記の他に当時の学者および志士、親戚門人の私信や詩稿・公刊した著書など数多くあり、山川菊栄はそれらを参考にしながら前出の『覚書 幕末の水戸藩』の他、『武家の女性』[27]『おんな二代の記』[28]の合計三冊の水戸関係の書物を著した。とくに『覚書 幕末の水戸藩』は「茨城県史研究」に連載されていたもので、一九七五年第二回「大佛次郎賞」を受賞している。芳賀徹氏が『武家の女性』の解説に書いているように、これら三冊はいずれも幕末社会史の豊かな証言として大いに尊重されてゆきべき作品である。山川菊栄は執筆に使った青山家の蔵書をそれぞれ茨城県立図書館、茨城県立歴史館、水戸市立図書館、茨城大学図書館等に分散して寄贈された。

「青山延寿日記」一覧

形態…横半帳　大きさ…縦15×横19㎝　本文に朱書きの傍線あり

番号	表題	元号（西暦）	丁数	備考
一	癸卯日録	天保一四（一八四三）	37	
二	甲辰日録	天保一五（弘化元）（一八四四）	56	
三	乙巳日録	弘化二（一八四五）	61	
四	表紙なし	弘化三（一八四六）	52	冒頭に「弘化三年丙午日記」と記載
五	丁未日録	弘化四（一八四七）	36	
六	戊申日録	弘化五（嘉永元）（一八四八）	33	
七	己酉日録	嘉永二（一八四九）	49	
八	庚戌日録	嘉永三（一八五〇）	42	
九	辛亥日録	嘉永四（一八五一）	40	
一〇	壬子日録	嘉永五（一八五二）	34	
一一	癸丑日録	嘉永六（一八五三）	38	
一二	甲寅日録	嘉永七（安政元）（一八五四）	41	表紙に「是冬改元安政」
一三	乙卯日録	安政二（一八五五）	39	
一四	延寿日記	安政三（一八五六）	38	
一五	丁巳日録	安政四（一八五七）	32	子供の落書あり
一六	戊午日録	安政五（一八五八）	23	子供の落書あり
一七	己未日録	安政六（一八五九）	10	
一八	庚申日録	安政七（万延元）（一八六〇）	21	
一九	万延元年長岡事件	万延元（一八六〇）	4	庚申二月長岡一件記事
二〇	辛酉日録	万延二（文久元）（一八六一）	17	表紙に「是歳改元文久」
二一	壬戌日録	文久二（一八六二）	23	
二二	癸亥日録	文久三（一八六三）	14	裏表紙なし
二三	甲子日録	文久四（元治元）（一八六四）	40	表紙に「是歳三月改元治」
二四	乙丑日録	元治二（慶応元）（一八六五）	26	表紙に「是歳改元慶應」
二五	丙寅日録	慶応二（一八六六）	9	
二六	庚午日録	明治三（一八七〇）	38	
二七	辛未日録	明治四（一八七一）	36	
二八	壬申日録	明治五（一八七二）	44	
二九	癸酉日録	明治六（一八七三）	21	「紀元二千五百三十三年一月一日」
三〇	甲戌日録	明治七（一八七四）	22	裏表紙なし
三一	丙子日録	明治九（一八七五）	31	「大阪海路日記　七月」記載あり

おわりに

最後に青山延寿の基礎資料および著作に関する調査の中で気づいた点をまとめてみたい。

まず、全体的に感じたことは、青山家はこれだけの学問の系譜がありながら、一般にあまり知られていないことである。とくに青山延寿自身の研究についての研究書・論文が少ないように思う。その中で研究書は大森林造氏の『常北遊記』、最近の論文では同じく大森氏の論文がある。[29] 小松徳年氏が「ひろば 郷土の群像：青山延寿」[30]で述べているように「党派に与せず、中庸を重んじた青山家の人々は人気がない。まして明治以降天狗党がもてはやされる中にあって、青山家の評価は低い。しかし、史学に長じた青山家の人々の党派を超越した努力があったればこそ『大日本史』の完成も期すことができた」といえる。今後、青山家に対する評価が見直されてさらに研究が進むことを念じたい。

次に延寿の著作の中で刊行されていないと思われる作品をあげてみる。まず、延寿の墓碑銘や清水正健『増補水戸の文籍』などに記されていた「鉄槍斎文集」は、延寿の著作のアンソロジー的な要素が強い「鉄槍斎文鈔」のことかと最初勘違いしていたが、『増補水戸の文籍』を読みかえしてみたら、「完備に至らずして止む」とあったので未刊の可能性が強い。その他、延寿著作で未刊の（あるいは完成に至らなかった）ものには、「武門軌範」「韜略類篇」、「皇朝通鑑」、若い頃に書いたという「読史偶筆」と史館で地誌を担当していた時に書いたと思われる「大日本地理志稿」などがある。しかし、既刊の書物の中に収録されているものがあるかもしれないのでさらに調査を行いたい。

ところで、青山延寿日記の解読を読み始めていた昨年のちょうど秋頃、水戸市立博物館で「安政江戸大地震と水戸藩」展が開かれることになり、安政二（一八五五）年の「青山延寿日記」を貸し出すことになった。その偶然が日記解読をさらに進めて行くきっかけとなったことはいうまでもない。また、弘道館職員録である「泮林年表」[31]の写本が弘道館にあることを最近になって知り、無事、閲覧することができた。今回の青山延寿年譜の作成に大変役に立った。

日記は私的な性格が強いので、字体も内容も読みづらく、意味不明な箇所がかなりあるが、一部分が山川菊栄の書物や[4][27][28]『水戸市史中巻』[32]鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』[33]などで引用されている。それらを手がかりに今後も引き続き日記を解読していきたい。また延寿だけでなく青山家の基礎資料の調査を継続して行っていく予定であるので、関係諸氏のご教示を切にお願いする次第である。

末筆であるが、本学磯田道史准教授には種々御指導頂いた。また、貴重な資料について紹介・閲覧・掲載をさせていただくにあたって次の方々や機関に御配慮をいただいた。記して謝意を表したい。

会澤潤子氏、秋山高志氏、小圷のり子氏、島崎和夫氏、鈴木暎一氏、玉川里子氏、永井博氏、吉成英文氏。

国立国会図書館、茨城大学図書館、東京大学史料編纂所、茨城県立図書館、茨城県立歴史館、茨城県偕楽園事務所 弘道館事務所、水戸市立図書館、水戸市立博物館、日立市郷土博物館、常磐共有墓地管理事務所。

注

（1）山川菊栄　明治二三（一八九〇）～昭和五五（一九八〇）年。東京都出身。女子英学塾卒。女性解放思想家。夫は山川均。

（2）青山延寿の長女・青山千世の娘が菊栄である。青山千世は安政四（一八五七）年生まれ。東京女子高等師範学校（現お茶ノ水女子大学）の第一回卒業生で女子教育の先駆者の一人である。青山千世については青木光行『幕末維新期の女子教育―青山千世小伝』（一九九八年　筑波書林）が詳しい。

（3）「水府系纂」水府明徳会彰考館所蔵。水戸藩家臣の系譜を慶応三（一八六七）年まで記録した史料、全一〇〇巻。写真版が茨城県立歴史館にある。

（4）山川菊栄『覚書 幕末の水戸藩』（一九七四年 岩波書店）は一九八二年『山川菊栄集』に収められ、さらに一九九一年岩波文庫から再刊。烈公斉昭・藤田東湖ら武士を中心に描く。

（5）（6）吉田一徳「烈公斉昭の紀伝進献とその編纂事業の終結青山延光の烈公跋文の

代作と青山家四代の史業」（『大日本史紀伝志表撰者考』所収）（一九六五年　風間書房）。

（7）「水府系纂」第六九巻

（8）『幕末の水戸藩』（一九七四年　岩波書店）三八四頁

（9）「鉄槍斎記」（青山延寿『鉄槍斎文鈔』所収）と高須芳次郎編『水戸学大系』第四巻（立原翠軒・豊田天功集）（一九四二年井田書店）の附・青山鉄槍集参照。

（10）舊雨社は明治五（一八七二）年、藤野海南が重野安繹らと結成した文雅の会。昌平黌の同窓を始め、文墨の士らが数多く集まった。明治三四年、麗澤社と合併。

（11）「舊雨社小伝」の草稿本（一冊　写本）が茨城県立歴史館にある。坂口筑母『舊雨社小伝』全四巻（一九八二～一九八五年　明石書房）は「幕末維新儒者文人小伝シリーズ」所収。青山延寿に関する記載は主に第四巻所収。国立国会図書館蔵。

（12）秋山高志「水戸藩士の古銭収集趣味」（『常総の歴史』九号　一九九二年）

（13）『覚書幕末の水戸藩』（一九七四年　岩波書店）一一五頁

（14）長南倉之助「水戸先哲烈士の墓（九）（青山鉄槍斎）」（『掃苔』八巻一号　一九三九年　東京名墓顕彰会）

（15）青山墓地は日本初の公営墓地。明治五（一八七二）年開園。歴史に残る政治家・文人・学者らが多く眠る。所在地・東京都港区南青山二丁目。

（16）藤野海南（正啓）。文政九～明治二一年（一八二六～一八八八年）年六三歳。明治前期の歴史家。松山藩士。松山藩の長州征伐や戦後処理に尽力した。明治二（一八六九）年昌平黌教授となる。明治五（一八七二）東京府誌を編修。その後修史館編修者になり「先朝紀略」等を編纂した。

（17）『水戸学大系』第四巻　二九二頁

（18）（21）大森林造訳『常北遊記』（「ふるさと文庫」所収　一九九〇年　筑波書林）

（19）『覚書幕末の水戸藩』（一九七四年　岩波書店）あとがき四一五頁

（20）『増補 水戸の文籍』（清水正健著　一八三四年・一八七一年再版 水戸の学風普及会）

（22）『水戸学大系』第四巻（解題）一一頁

（23）秋山高志「水戸藩士の富士登山―近代登山史のひとこま」（「歴史館報」七　一九八〇年　茨城県立歴史館）

（24）貴重図書室（茨城大学図書館）昭和五八（一九八三）年、図書館に新館が増築されたときに設置。五〇㎡。主に近世文書を中心とした史料を所蔵している。貴重図書室の史料は人文学部故河内八郎教授（一九七四～一九九〇年在職）が中心となって整理に着手。教育学部鈴木暎一教授（現常磐大学教授）の協力を得て図書館と人文学部の共同で整理と調査を行ってきた。なお、河内教授が一九九〇年急逝された後は長谷川伸三教授（一九九一～二〇〇三年在職）（現大阪樟蔭女子大学教授）に引き継がれ、現在は磯田道史准教授が整理・調査を行っている。筆者も本務の傍ら、調査に参加している。主に歴史学の大学院生および学生によるアルバイトあるいはボランティアを中心とした整理で、現在までに茨城大学図書館発行で史料目録「稲葉家文書目録」全五冊、「中崎家文書目録」（一）「中崎家文書目録（二）・諸家文書目録」（「鶴田家文書目録」「羽部家文書目録」「結城町宮田家文書目録」を収録）、史料双書「水戸下市御用留」全九冊を発行している。最近では文化六（一八〇九）年の石神組郡奉行所の記録である「石神組御用留」の解読を東海村のグループと共同で行っている。なお、茨城大学図書館にはこの他に「菅文庫」等の貴重史料がある。

（25）「青山延寿日記」仮目録　一九七四年 水戸市史編さん係編。

（26）『武家の女性』（一九八一年　岩波書店）はしがき

（27）『武家の女性』（一九四三年　三國書房　女性叢書）岩波書店から一九八一年『山川菊栄集』に収められ、一九八三年岩波文庫に収められて再刊。幕末水戸藩下級武士の生活と女性の日常生活を描く。

（28）山川菊栄『おんな二代の記―私の半自叙伝』（一九五六年　日本評論社）一九六六年『おんな二代の記』として平凡社から東洋文庫に収められて再刊・さらに一九八二年『山川菊栄集』に収められる。明治から昭和にかけて千世・菊栄親子を中心に描く。

（29）大森林造「藤田東湖・青山延寿と河原子」（「郷土ひたち」河原子特集　第五六号　二〇〇六年）

（30）小松徳年「ひろば郷土の群像：青山延寿」第二〇巻第一号 No.二二八（一九八三年四月号　茨城県総務部職員課　茨城県立歴史館蔵）

（31）「泮林年表」天保一二（一八四一）～明治二（一八六九）年までの弘道館職員録。水府明徳会彰考館蔵　茨城県偕楽園事務所 弘道館事務所に写本がある。

（32）『水戸市史』中巻（二）「第一四章 士民の生活・風俗」（三）「第一七章 水戸学の発展と尊王攘夷論」「第一八章 士民の向学と文化の普及」（四）「第一九章 弘化嘉永期の藩情」「第二〇章 安政の改革」（五）「第二二章 尊王攘夷の激化と万延文久期の藩情」「第二三章 元治の激動と天狗党」「第二四章 門閥派の政権慶応期の動向」一九六九～一九九〇年 瀬谷義彦・鈴木暎一・尾藤正英・秋山高志執筆　他。

（33）鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』（一九八七年 吉川弘文館）